

カール・フォスラーの思想とそのアクチュアリティ

——啓蒙主義とロマン主義を再考するために——

岩本智孝（大阪大学・次世代挑戦的研究者育成プロジェクト生）

カール・フォスラー（Karl Vossler, 1872-1949）は、20世紀前半に活躍したドイツの言語学者である。フォスラーは日本のみならず国際的にも限定的にしか顧みられてこなかった（日本で深く取り上げた研究者としては、小林英夫、鍋島能弘がいる）。しかし、このような盛り上がりの小ささに反して、フォスラーの言語思想は豊かであり、哲学的にはベネデット・クローチェの影響を受けながら、フォスラー学派と呼ばれる学派を形成し、文献学者レオ・シュピッツァーの文体論へと受け継がれていった。

とりわけ発表者がフォスラーに注目する理由は、同時代の哲学者であるエルンスト・カッシーラーとの著作を通じた論争にある。カッシーラーは主著『シンボル形式の哲学』（1923-1929）において、言語の形式から科学の形式への発展を描出した。この発展の評価に関して、フォスラーを引き合いに出しながら、持論を展開している。カッシーラーは、身振りといった素朴な言語から科学的記号（およびそれらの形式）への発展を信じて疑わない。それゆえ、カッシーラーは啓蒙主義者である。それに対し、フォスラーは、論理的・科学的思考は、言語的・直観的思考から転向・離反したものだにとらえる。ゆえに、フォスラーは個人の主観を重視するロマン主義者である。

啓蒙主義とロマン主義の議論を現代において再考するとき、言及しなければならないのが、ホルクハイマーとアドルノの『啓蒙の弁証法』（1947）である。フォスラーは彼らと同様に、啓蒙を「夢の克服、神話的・魔術的・幻想的なものにおける予感と没入の克服」（*Geist und Kultur in der Sprache* 1925/1960, S.158）にとらえている。啓蒙の神話化・野蛮化を追及しつづけるのか、あるいはハーバーマスのように、それでもなお取り上げることが可能な理性を模索するのかが現代哲学における一つの大きな問題である。

啓蒙を批判的に眺め、他方にはその政治的反動性を問題視されてきたロマン主義は、既存のイメージに反して、その中心的な担い手であった初期ロマン主義者のノヴァーリスにおいて啓蒙主義と合流していたことが近年指摘されている（cf. 今泉文子『ノヴァーリス 詩と思索』2021, 85頁）。そして、この現代的文脈からフォスラーを考えたとき、個人の主観が活躍する場である文体論を構想しながら（＝ロマン主義的）、その文体論による学的体系を志向した（＝啓蒙主義的）フォスラーの二重性は、啓蒙主義とロマン主義の議論に一石を投じうるものとして立ち現れる。本発表ではこの可能性の描出を試みたい。